

落語と会話ルール

—観客の笑いを手がかりとして—

金 沢 裕 之

1. はじめに

私は以前落語の笑いについて、実演の録音テープを資料として、そこから聴き取り得る観客の笑いの反応を鍵として分析をしてみた。その具体的な方法は、古典落語と新作（創作）落語からそれぞれ一つずつ選んだ二つの作品を対象として、その録音テープから聴き取れた範囲で笑いの反応が認められた所（口演時間31分30秒の古典で108箇所、同じく18分30秒の新作で67箇所）に注目し、それらの笑いの反応を引き起こしたと思われる噺の部分を分析するというものであったが、その分析の結果として、次に挙げるような五つの種類が分類できた。

- (A) ことば（語・句）の誤解に由来するもの
- (B) ことば（語・句）のイメージに由来するもの
- (C) 会話のやりとりに由来するもの
- (D) 登場人物の認識に由来するもの
- (E) 演者の演技や演出に由来するもの

今回は、このうちの(A)と(B)とを比較対照しながら、ことば（語・句）から生み出される笑いについて考えてみた訳だが、今回はこの分類でいえば(C)に関わる、噺の中での会話のやりとりから生み出される笑いについて考えてみたいと思う。

尚、対象とした作品は次のとおりである。

- ① 「道具屋」（古典） 柳家小三治
昭和53年10月 東京新宿・安田生命ホールにて収録
- ② 「真心サービスおじんタクシー」（新作） 桂三枝
昭和57年9月 大阪梅田・バーボンハウスにて収録

2. 会話のやりとりから生み出される笑い

総数175に及ぶ笑いの反応の認められた箇所のうち、実に37.1%（「道具屋」では38.0%、「真心サービスおじんタクシー」——以下「おじんタクシー」と略称——では35.8%）にあたる65箇所がこの項目に分類されたが、この結果については意外な感が強かった。

落語の笑いという一般的なには、ことばの誤解やバカバカしいほどの突飛な着想や誇張された表現による

ものという印象が強いので、それらに比べると地味なものともいえる会話のやりとりの中から生み出される笑いが、最も大きな割合を占めるとは思えなかったのである。しかしこうして実際の口演を細かく分析してみると、この項目以外の、どちらかというとなり作りの傾向が強いものに比べて、会話のやりとりから来る笑いは日常生活にも起こりそうな自然な感じがあり、状況による変化はあり得るとしても、我々の身近な感覚に根差しているその点から、かえって予想以上に大きな数値を得たものと考えられる。また今回は実演のテープを分析の材料にしており、文字化されたテキストからは窺いにくい微妙な呼吸や間をも広く対象にしていることが、こうした結果に大きく反映しているのかもしれない。

さて、この項目に含まれるものは、更に、大きく二つに分けることができるように思う。一つは、周囲の状況までも考えに入れた、かなり広い意味での、場面についてのルールに対する違反である。そしてもう一つは、会話のやりとりによる話の流れの異常から、おかしさが生み出されてくるものである。ただし、この両者は明確に区別することが難しく、また双方に関わっていると思われる笑いの例も少なくない。このことを断った上で、以下では実際の例についてそれぞれ見てゆきたいと思う。

(ア) 場面についてのルールへの違反から生み出される笑い

まず、場面についての（実際の使用の場における）ルールに対する違反の例を、明らかなものから見てみよう。

(1) 「（お前は）どっから来たんだ？」

「あたいはねえ、神田三河町の壱兵衛ンとっから来た、あの甥で、与太郎さんて言うの」(①)

(2) 「ああ、お早うございます。どうですか、お身体の方は？」

「はい、お身体、大丈夫です」(②)

一読してわかるように、これらは敬語のルールに違反している。(1)では、自分の名前に「さん」と尊称を

つけながら、仕事の世話をしてくれた小父さんと呼び捨てにしているし、(2)では、相手の「お身体」ということばにつられて、自分自身のことについても「お身体」とオウム返しで丁寧表現を使ってしまっている。(1)の例はかなり作爲的な感じがするが、(2)のような例は、我々の日常生活においてもしばしば見受けられることである。

また『道具屋』には、相手を目前にして、その当人の悪口や欠点を言うという例が多いが、これなども広い意味での会話のルールに対する違反であるといえよう。

(3) 「ア—ア—、聞いてたよ。あの、空兵衛さんになア—人の甥があつて、この男が頭がバカ……バカに丈夫だつて。お前かア」(①)

(4) 「おい、変なことヲ言うなよ。な—んだ、あんまりいいもん持って来ねえなア、オーイ、ええ、みんなゴミ(④道具屋の符丁で中途半端な商品のこと)だなア」

「エエッ? ああそうそう、ゴミ、ゴミ。へ—ッ、おじさんとこのもガラクタだ」(①)

(5) 「雨の降った日なんぞこやつて、家の縁側でもって庭見ながら、ヒゲ抜いてんのもいいもんだなア」

「雨降ってる日に家でヒゲ抜いてるようじゃ錢ありませんねえ」

「余計なこと言わなくていい……」(①)

「おじんタクシー」にもこんな例がある。

(6) 「それでは、広沢瓢之助さん」

「はい、お早うございます」

「相変わらずきたない声ですなア」

「ええ、きたない声は生まれつきだんねけどなア」(②)

これまで挙げた違反は、謂わば社会一般のルール(常識)への違反とも言うべき普遍的なもので、その意味もわかりやすいが、実際の落語には、もっと嘸の内容に密着した(具体的情況に即した)ルール違反が多い。言い換えれば、登場人物が周囲の情況をよく弁えていなかったり、混同したりすることによって、ルールに違反する(置かれた情況に相応しくない)発話をしてしまう場合である。

『道具屋』の嘸は、愚か者の与太郎が小父さんに世話をしてもらって半端物の古道具屋を開く訳だが、彼は訪れてくる客とのやりとりの中で、扱う商品のネタを割って(秘密をバラして)しまう。

(7) 「ああ、そこのお前の後ろにある、そのな、三本

足の真鍮の燭台見せな」

「エエッ? ああこれですか。これねえ、三本足なんだけど一本欠けちゃつてつから、二本がないんですよ」

「二本じゃ立たんじゃろ?」

「へエッ、立たないんです。だから後ろのレンガの塀へこう、寄っかかつてます」(①)

(8) 「おい、ええ、そこにある股引き、股引き」

「アッ、股引きすかア。ええ、これねえ、あのう、これ穿いてよろけるといけませんよ」

「なんだこりゃあ?」

「これはね、ひょろびりの股引きという……」

「この野郎、なんでもネタア割つちまうんだなア」(①)

(9) 「(その鑷は)焼きがまわつてねえなつてんだよう」

「アッ、焼き? それね、こんがり焼けてるよ、それは。小父さん火事場で拾つてきた」(①)

似たような例は「おじんタクシー」にも見られる。

(10) 「エ—エ—、もう元気です。ただちょっと手が震えるのとな、目がかすむ以外は、ハツラツ……」

「どこがハツラツや。大丈夫ですか、運転の方は?」

「エ—エ—、その運転は、何とかごまかしてな」(②)

(11) 「はあはあ、上六(上本町六丁目)、はいはい、はあ、上六のどのあたり?」

「いや、あの、ちょっと書いたもん持ってんねん。ちよつ、ちよつとこれ見てんか? はッはッ早いこと、ちよつと行ってほしいねん」

「はッ、はあはあ、ハ—ハ—く案内図をじっくり眺める、こらわからんわ、こらアわかりまへんわア」(②)

(12) 〈タクシーの運転手が客に釣り銭を渡す場面で〉

「ええ、わッわかつてまんねん、ええ。エ—、190円。100円ねえ、エ—9……細かいのがなかなか……、エ—、10円、……」

「もうええわ、もう。もッもッええわ。もう、おおきに」

「おッおおきにイ。ははア、また儲かつたア」(②)

これらの例は『道具屋』でも「おじんタクシー」でも、謂わば商売というもののあり方に関わる笑いで、普通の道具屋やタクシー運転手なら、当然ごまかして

(10)(12)は、そのごまかす例) 商売を進めてしまうところを、愚か者や老人の存在によってウラを観客に示し、笑いを誘っているのである。この方法は、少し大きく見れば、建前に対する本音のおもしろさに由来するものであると思われ、商売には多かれ少なかれ、必ずついてまわるものであろう。

情況を弁えない本音の発話のおもしろさという点では、商売に関わらない場合の例も多い。

(13) 「それはいいんですが、ちょっとあなたの運転は乱暴ですなァ、スピードを出しすぎる。……なぜそのようなお年で、そんな無謀な、乱暴な運転をするんですか？」

「わしゃもう、いつ死んでもええんです」(2)

(14) 「はあ、すいません。この頃ちょっとイライラすることがありましてなァ」

「イライラと？」

「そうです。息子の嫁がな、私のことをあることないこと、息……」

「ちょっとちょっと、わかりました。その話聞いてると長くなりますので」(2)

(15) 「難儀なんに乗ったな、もう。……早うしてえな、もう。ちょっと早いこと行かなあかんねん、早いこと行かな。……これ、もっもう走ってんのか？ 走ってんの？ 遅いなァ、もう。もうちょっと、頼むわ、ピヤッ、ピヤッ、ピヤッところ、たの……。亀にも負けんのんちゃうか」(2)

これらは登場人物が不平や不満をこぼしている場面で、その誇張された本音が観客から笑いを誘い出している。

また、情況を弁えなかったり混同してしまったりして不適当な発話をしているものには、次のような例もある。

(16) 「さあ、いらっしやい、いらっしやい。ただ今できたのの道具屋でござい。ホヤホヤの道具屋、あったかい道具屋。召し上がってらっしやい、寄ってらっしやい道具屋」

「なんだ、変な道具屋できやがったなァ。おい、ヨウッ、道具屋」

「いらっしやーい。お二階へ御案内」(1)

(17) 「んまァ、とにかく、とにかく早く、上、上六の方へ行ってんか、上六の方へ」

「はいはい、承知致しました。アァーッ、(以下、ゆっくりとした挨拶の口調で) 本日は、当タクシーを御利用いただきまして、誠にありが

とうございます。それではこのタクシー、ただ今から上六方面に向けて、出発をさせて……」

「早うしてえな、もう……」(2)

(16)では、道具屋の呼び込みであるにも関わらず、「できたの」「ホヤホヤの」「あったかい」「召し上がってらっしやい」などと食べ物屋の呼び込みのことが混同されており、客の訪問に対する「お二階へ御案内」というのも(この道具屋は露天のものなので当然二階などない)、女郎屋などでの掛け声が混同して使われてしまっているのである。また(17)では、客に対して親切・丁寧という会社の方針を遵守するあまり、急いでいる客に対しても長々とバカ丁寧な挨拶をしており、のんびりとした運転手と焦っている客との対照が、観客を笑いに引き込んでいる。

これらの場合は、その発せられたことばそのものが(独立して)可笑しい訳ではないのだが、情況(漸の内容や背景)の流れから大きく或いは小さく外れることによって、そこに笑いが生み出されてくるのである。そしてこうした流れに対するズレというものを、漸(落語)の内容や背景の面からだけではなく、話(ストーリー)の進行の面からも見てみると、そこにも正常な形ではない流れから笑いが生み出されている様子が見てとれる。

(1) 話の流れに対する異常から生み出される笑い
次に、話の流れに対する異常から笑いが生まれている例を見てみよう。

(18) 「おじさんはなァ、泥棒なんかやっちゃいないよ。同じドの字がついても道具屋だ」

「アッ、じゃああの、おじさんかァ。お月さん見るとはねるってのは？」

「なーんだ、そりゃあ？」

「へ道具屋お月さん見てはねる……」(1)

(19) 「お前、親父はどうした？」

「親父、ずっと以前に死んじやったんです」

「ああそうか、そりゃ気の毒なことしたなァ。フーン、寺アどこだ？」

「寺アあの、^{タナ}田圃の広隆寺だったんですよ」

「ああそうか。あすこは土が軟らけェから穴堀りや楽だなァ……」(1)

(18)は「道具屋」と「十五夜」の(かなり強引な)地口が笑いの元になっているのだが、それを含みとして突然言い出される「じゃああの、おじさんかァ。お月さん見るとはねるってのは」ということばが爆笑を生み出しており(※印の所)、この笑いは、地口を理解し

たというより、話の流れが突然大きく変わる（観客にとっていきなり意味不明の発話が出てくる）ところからもたらされているものと考えられる。一方(19)の方は、親父の死のことから寺、更には寺の土や穴堀りのことに話が移行している。この話の進行は一見スムーズなようであるが、普通初対面の客と商人との会話では、肉親や知人の死にまでは話が行っても、それが更に葬られた寺や寺の土のことにまで及んでゆくことはないと思われ、「穴堀り」のことにまで話が登場してくる突飛さが、やはり会話の流れに微妙なズレをおこして大きな笑いを生み出しているものと思われる。

この他に、正常な話の流れを妨げるものとして繰り返しがあつた。長くなりすぎるので引用はしないが、(19)に登場した客と与太郎とののんびりした会話で、客は次々に与太郎の身の上のことを尋ねてゆく。そして話が一段落したところで、また（改めて、というように）初めから、前と同じ質問を繰り返してゆく。この繰り返しは都合三回行なわれ、二回目・三回目は、質問が寄せられるその都度かなりの笑いを取っている。これなどは話の流れをズレさせている場合とは異なり、流れを停滞（或いは後戻り）させることによって話の正常な進行を狂わし、そこに観客の笑いを引き寄せているのである。

繰り返しの例に加えて、話の流れをちょっと停滞させるものに、逆転がある。これは落語の中には比較的数量多く見られるもので、ほとんどは話者や話の内容が、立場を入れ替えて逆になってしまう形をとる。

② 「ムシロ広げてたって、おじさん、ここんとこ水がたまってきたねえ」

「ああ、水がたまってると思った。おい、そのなア、便所の脇に箒が立て掛けてあんだろ？
それでもって水はいて。一服してるうちにやあ乾くから」

「ああそうか。この箒でもって水はいときゃいいんだ、これね。よいしょっと、よいしょっと……」

「オオオオ、オイッ。こっちィ向かってはくやつ……。むこう、むこう、むこう向けよゥ。泥水はね返って、きたないよゥ」

「一服してるうちにやあ、乾かア」(①)

(21) 「あつ、ノコギリすかア。ノコギリならノコギリってそう言って下さいよ。それあーた、タケノコだのカズノコだのって言うから……」

「それお前が言ったんだよ、そりゃあ」(①)

② 「しかしなア、ああ言うとったけど、別に急ぐ用事やなしなア、ゆっくり行きゃあええのやから、……お年寄りも一生懸命働いてんねや、そのために思て、できるだけお年寄りのん乗ってなア、生活のためにも、我々若い者が年寄りを大事にせないかん。へーエ、お年寄りの……、へーイ、タクシー！」

くと運転手が年寄りのタクシーをつかまえるが、この運転が極端に荒っぽかったので

「ハアハア、ハア、アー怖かったア。アー、今日の年寄りは若い者を大事にせん」(②)

(20)は話者があべこべになってしまった形、(22)の場合は、「若い者が年寄りを大事にしよう」という考えが、「年寄りが若い者を大事にせん」と逆転してしまう形である。

更に、これは演出や演技に関わる要素も多いが、演者が登場人物の口を借りて、自身のことば（本音らしきこと）を喋るという場合がある。この例でよく見られるのは、演者が言い間違いをしたり断の段取りに不備があつた時、それを登場人物のことばを借りてごまかしてしまつたり逆に明らかにしてしまつたりして、そのミスをカヴァーしてしまうというもので、実際の口演の中では抜群によく笑いを取る手法である。これなども落語本来の話の流れ（そこでは演者そのものの存在は消えている）に、変化が（意識的・無意識的に）加えられ、演者の意識が挿入されることによって、観客にかえって新鮮な笑いを生み出すものであるといえよう。

「おじんタクシー」の中に、こんな例が見られる。

(23) 「もうちょっと新しいのん（㊦カセットテープのこと）かけて、新しいのん」

「はあは、新しいのん。はいはい、へエ、新しいのんな」

カシャッ！〈カセットテープを入れる音——バックの音楽がすぐ流れる筈だったが、機械の不調で音が出なかった〉

「はっ、新しいのんかけまっさかい、ちょっと待っとくんはなれや。調子がなア、悪い……、いつもは、大体すぐにな。ちょっと待っとい……」

(②)

これまで何回か、話の正常な流れ（或いは進行）ということばを使ってきたが、そもそも実際に口演される（よりははっきり言えば、された）話の筋というものは一つしかない訳で、そこには正常とか異常とかいう問題はない。では何をもって正常とか異常とかの基準

にするかという、例えば(19)や(22)に見られるように、我々一般人が通常に抱く意識(話の展開への予想)に沿っているかどうかということが、大きなポイントになっているものと思われる。

落語における「オチ(サゲ)」とは、高い所へ上げたものを下に落とすことだとよく言われるが、この場合高い所へ上げられたり落とされたりするものは、観客の意識に他ならない。現実のものではない、虚の世界の中でのそうした意識のさまざまな動き(運動)が、きっと快いものとして観客の心に捉えられ、その「快さ」が「笑い」という具体的な形になって外に表われてくるのではないだろうか。そして、こうした意識の動きを引き起こす元として、例えばこれまで見てきたような、ズレ・飛躍・繰り返し・逆転・挿入といった話法上の手法が用いられているように思われる。

笑いに深く関わっている観客の意識というものを、少し異なった面から見てみたい。

(24) 「おいおい、与太郎、毎日お前^{おん}ブラブラ^ら遊んでばかりいるってえじゃねえかよう」

「エエッ？」

「遊んでばかりいるてえじゃねえか」

「ウン、あの遊んでるとね……、毎日楽でいいや」(①)

(25) <与太郎と話をしながら、道具屋の店先でゆっくり売り物の毛抜きでヒゲを抜いたあとで、客が>

「フン、ああ、大分きれいになったろう？」

「あのう、ええ、このほったのここんとこへ、白いの二本残ってますよ」

「おお、そうか。じゃお前、ちょっと目のいいとこで抜いとくれ」

「ああそうすか。じゃあのねえ、動くとだめですよ、動くとな喰っちゃうから。よいしょと、よいっと、ハアッ、抜けた」

「ハア、そうか。ああ、さっぱりした。……また来よう」

「し(ひ)どい人がいるね、あの人は。こりゃ驚いたなどうもなア。ああやって毎日、ヒゲ抜きに来んのかなア、こりゃなア。気をつけなくちゃいけねえや、こりゃ」(①)

(24)では、与太郎の「遊んでるとね」と「毎日楽でいいや」との間に、約1.6秒の間(波線部)があり、観客はこの間に「(遊んでばかりいると)仕事をしなくなっちゃう」とか「却って退屈しちゃう」とか、いずれにしても「遊んでいる」ことが必ずしも楽しい訳ではな

い、という内容を、漠然とイメージすると考えられる。しかし続いて出てきたのは、「毎日楽でいいや」という「遊んでいる」ことを全面的に肯定することばで、予想が見事に裏をかかれることから観客は大きな(笑いの)反応を示す。また(25)でも、「この客は毛抜きを買ってゆくに違いない」という与太郎の予想(期待)はアッサリと覆され、話の流れや話術から(多分無意識のうち)に与太郎の側に立っている観客も、「ああ、さっぱりした」のあと約1.8秒の間を置いて発せられる「また来よう」のことばに、これまた上手く騙されてしまう。

こうした例は間を上手く使うことによって、本来一つしかない話の展開の中に観客の意識を無意識のうちに(勝手に)挿入させ、その意識と実際の話の流れとの間にズレをおこさせることで、笑いの反応を呼び起こしていると考えられるのである。

3. おわりに

落語における笑いのうちで会話のやりとり由来するものについて、大きく二つに分類しながら具体的な例を追って見てきた訳だが、更にもう一度この項目を全体として眺め直してみると、会話における異常(ズレ)が笑いを生み出す元になっている、という共通の性格が窺われるように思う。異常に対する正常(なもの)としては、文法的な規則に近い確固としたものから、社会一般の常識的なルール、情況と関わる発話の必然的な(或いは蓋然性の高い)流れ、言語行動としての談話の性格、観客の意識の流れ、といったかなり微妙なものまで、さまざまなレベルのものが考えられるが、発話の流れを強く或いは弱くリードしてゆくそれらの要素からの逸脱が、この項目の笑いの基盤になっていることだけは間違いないようである。

今回の、事例研究と言うべきわずかな資料から、そうした発話の流れをリードしてゆく複雑な会話の動的な(実際の運用場面に関わる)ルールの全貌を明らかにしてゆくことは到底できないが、少なくとも、落語における笑いという反応が、広い意味での動的な会話のルールというものの一端を、ネガティブな形ではあっても、浮かび上がらせているということは言い得るように思われる。多種多様な観客達が、ある発話について一斉に笑い声を上げるという行動(現象)は、既にその発話に対して(何らかの意味での)注意の黄信号が発せられている、という意味を含んでいるのに違いないのである。

そして、今回の(C)項目の笑いに関わるルールという

ものは、これまで見てきた例からもわかるように、かなり深くそのことばを有つ国の文化と関わるものである。言い方を換えれば、ことばの表面的な理解だけではとても笑いつながらない場合も多い。今後はそうした文化的な背景をも視野に入れ、更に多くの資料を集めてゆくことによって、日本(語)における会話の動的なルールを明らかにしてゆきたいとともに、例えば諸外国における笑芸や笑いとの比較を行なうことによって、それを担っている文化の構造との比較対照にも考察を進めてゆきたいと思う。

末筆ながら、今回の資料収集においては、桂三枝さんをはじめとする『創作落語の会』関係者から協力をいただいた。記して謝意を表したい。また本稿をまとめるにあたって、編集委員の皆様から有益な御教示をいただいた。併せて感謝致します。

- <注1> 「落語における笑いをめぐって」(『言語生活』398, 1985)
- <注2> この点については宮井捷二氏の「落語の意味論」(『信州大学教養部紀要』16, 1982)から多くの教示を受けた。宮井氏は言語行為論(Speech Act Theory)の立場から、落語における会話のルールへの違反について、詳しく分析している。
- <注3> この点では最初の分類の(D)項目とも関わ

るが、(D)の方は、例えば、鯉の滝上りの習性を利用して、バケツから川に水を流しながら「滝だぞう」と叫んで、滝と間違えてその水を上ってくる鯉を捕まえようとする(①)というように、登場人物の考えや発想そのものがナンセンスでおかしいものである。

- <注4> この例や後に出てくる逆転の場合などは、前もって断っておいたとおり、噺の内容とも大きく関わっていると思われる。
- <注5> 中には意識的に間違えておいて、それをカバーすることによって笑いを取る、という方法もあるらしい。
- <注6> 桂枝雀氏はこの状態を、「緊張の緩和」と表現している(『緊張の緩和とサゲの四分類』『上方芸能』68, 1980, ほか)。
- <注7> 発話における「間」の実態をさまざまな面から研究している大橋勝男氏は、落語を対象とした分析(『国語の生きさま(その八)』『新大國語』10, 1983)の中で、こうした種類の笑いを、「内容上の、深い真のおかしさ・おもしろさによる〈笑〉」と評価している。

(大阪大学大学院学生)

東京・神奈川における《新方言》の地理的分布(2)

石井直子

1. はじめに

本稿は、『日本語研究』第6号に発表された「東京・神奈川における《新方言》の地理的分布」に続き、都立大学・国際基督教大学(ICU)学生による言語地理学的調査の結果の一部を報告するものである。前掲論文発表後、調査対象地域は神奈川県西部まで拡大された。

報告に際しては、ICU学生が作成し、井上史雄東京外国語大学教授にレポートとして提出した言語地図の中から石井が項目を選び、考察を加えた。掲載する言語地図の作成者名は次の通りである。

図1. 2 松山龍彦

図3. 刈田さゆき

さて、「新方言」とは「若い世代に今ひろがりつつ

あり、改まった場面では余り用いられず(つまり文体が低く)、しかもいわゆる標準語、共通語とは語形が違うもの」(井上1985a)と定義されている。今回報告する「舌」及び「チガクッ」は首都圏における「新方言」の典型として、先行の諸研究によってたびたび言及されている。これらについて東京・神奈川のほぼ全域にわたる年齢層別の言語地図を示し、検討することは意味の無いことでもなかろう。

2. 舌

図1は日常の使用語形、図2はあらたまった場面(目上の人に報告する時)での使用語形の分布図である。

まず、図1から見ることにする。老年層の図では「シタ」が多く、ほぼ全域に分布している。ついで「ベ